

サッカー部の名マネージャーだった 歴戦の自動車部隊中隊長

神野清一郎

昭和 11 年学部卒業 享年 35



明治 44 年 10 月 東京日本橋生れ
高等師範付属中学

昭和 5 年 4 月 東京商大予科入学
山口ゼミ

卒論「ホオトレイの貨幣論に関する一考察」
昭和 11 年 3 月 東京商大学部卒業
家業の織物問屋に勤務

士官学校を経て近衛輜重連隊に入隊

昭和 13 年 6 月 支那事変のため中国へ出征

自動車部隊小隊長、中隊長として武漢攻略戦等転戦

昭和 16 年 8 月 召集解除、帰国

昭和 17 年 山瀬泰子と結婚

昭和 18 年 長男・匡司誕生

昭和 19 年 7 月再応召、自動車中隊長として沖縄へ

(兵役免除を申請したものの却下されたと思われる)

昭和 20 年 6 月 20 日 沖縄本島・真壁にて戦死。陸軍大尉

父・神野清一郎に捧ぐる記

神野 匡司

残暑厳しい本年 8 月某日、我が家に一人の来客があった。突然の来訪者に戸惑いを隠せぬまま応対する私に、「一橋いしぶみの会」の世話人を名乗るその方は、長年心に抱き続けて来た亡父に関する報せをもたらしてくれたのであった。

私は清一郎の長男として生まれたが、生後 1 年余りで父は召集、沖縄で戦死したため私自身に父の記憶はない。私を生んだ母は、戦後暫くして復員した父の末



出征時の神野

弟（即ち私の叔父）のもとへ再嫁し、私も叔父の養子となった。幼い私への配慮か、長兄への対抗心か、はたまた自身の矜持のためか、今となっては知る由もないが、養父となった叔父は父に関する一切の情報を封印、母もまた私の本当の父について語ることはなかった。私が自身の出自について知ったのは中学生の頃。同居していた祖母が涙ながらに「沖縄で戦死した伯父」としか伝えられていなかった清一郎が本当の父であること、思いやりのある優しい息子であったことなどを話してくれた。物心ついた頃から何とはなしに感じていた、養父とのどこかよそよそしい関係に得心が行ったのを今も覚えている。

その後も養父の前では何も知らぬ顔をしたまま私も成人し、妻と出会って結婚、一男一女をもうけた。やがて養父も、そして母も彼岸へ旅立った。そうやって初めて、自分が実の父親について余りに何も知らないこ



自動車部隊に所属していた神野

とに思い至り、妻の勧めもあって散逸していた亡父に関する写真や資料などを拾い集め、往時を知ろうとしたものの、既に手掛かりも、当時を知る人もないまま徒に時ばかりが過ぎて行った。ただ一つ慰めとなったのは、沖縄の戦没者を慰霊する「平和の礎」に父の名が刻まれていると知ったことであった。以来、幾度か妻や子、やがては孫を伴って彼の地に足を運び、礎に刻まれた名に触れることで僅かに父のよすがとして来たのである。



サッカー部の仲間と

それが今夏、冒頭で述べたように全く思いがけず大学時代の父についての報がもたらされた。サッカー部に所属していたこと、マネージャーを務め、当時低迷していた部を一部リーグまで復活させる原動力の一端を担っていたこと、先輩を敬い、後輩に慕われる優れた人柄であったこと、本名「清一郎」の他に通称「光司」を名乗っていたこと（私の名前「匡司」にその 1 字が伝えられていたことも分かり、感動）…等々息子でありながら知らなかったことばかりで、今も驚きと興奮が冷めやらぬままである。

知ることが許されなかった、そして遅まきながら知ろうとした時には時既に遅いと諦めかけていた父の生前の面影に触れることができ、「一橋いしぶみの会」には感謝の念に堪えない。父が確かに生きていたこと、自分の中にその血が受け継がれていることを実感し、齢七十五を過ぎた身ながら、「生まれて来て良かった」という喜びを噛みしめている次第である。父が遺してくれたこの命のバトンが子や孫に、そしてその先にも続くようにと心から願っている。